

# 連体修飾句における「の」と「が」の使い分けについて

本子 叙社並目

はじめに

日本語では、「雨の降る日」「英語のできる人」のような、「体言十の十述語十体言」という構造を持つ表現が、ごく普通に用いられる。この種の表現は連体修飾句(節)と呼ばれているが、一方でこれらは「雨が降る日」「英語のできる人」という形でも使われる。「の」と「が」のどちらも自由に使えるのであるが、だがそれは、どんな連体修飾句でも、というわけでもない。例えば、「ぼくが弟と喧嘩した日」の例では、「ぼくの弟と喧嘩した日」と変えることはできない。

どんな場合に「の」と「が」が自由に置き換えられ、どんな場合にできないのか。このようなことは、日本人には自明なことなのだろうが、私たち外国人には判断に苦しむことばかりである。もともと、日本人の友人たちに尋ねた限りでは、彼らも両者の違いを認識しているわけではなく、よく分からないまま何となく使い分けているというのが実情らしい。そこでこの稿では、この種の連体修飾句における「の」と「が」の使い分けについて、これまでの研究に導かれながら考えてみることにする。

## 一 「の」と「が」の機能

### 1 「の」と「が」の機能

まず、連体修飾句の中の「の」「が」の機能について考えることにするが、その前に格助詞「の」「が」そのものについて確認しておかなければならない。

格助詞「の」「が」について、古くは、「の」が連体修飾、「が」が主格とされるのが一般であった。

雨の日 連体修飾

雨が降る 主格

後に挙げる、山田孝雄氏、橋本進吉氏、佐久間鼎氏など、みなその例である。

それに対して、「が」が主格だけでなく対象(語)格も表すと指摘したのは、時枝誠記氏(『日本文法 口語篇』二七七頁)である。時枝氏は、それまであまり顧みられなかった

仕事がつらい。 算術ができる。

などの例を取り上げて、これらの例で主格と言えるのは、私は仕事がつらい。 彼は算術ができる。

における「私」「彼」であつて、「仕事」「算術」は「述語の概念に対しては、その対象になる事項の表現である」として、これらを「対象語」と命名し、「対象語格」なる格を設定した。

こうして、時枝氏以後一般に、「が」は、主格と対象(語)格を表す、と説明されるようになった。

## 2 連体修飾句中の「の」と「が」

連体修飾句の中の「の」「が」も、時枝氏の指摘を境として、それ以後は一般に主格と対象(語)格を表すと説かれるようになった。以下、念のために、主格説および主格・対象(語)格説の主要なものを、紹介しておく。

### 「主格説」

#### ①山田孝雄氏「日本文法学概論」四〇九頁

「の」の第三の場合には、単文の主格を示すものと付属句の主格を示すものとあり。甲の場合には、  
鶯の鳴く。

などの例にして、これは文語のみに用ゐらる。

乙の場合には、文語にも口語にも用ゐらる。

鶯の来鳴く梅が枝。(連体格たる句の主格) (文語)

鶯の来て鳴く梅の木。(同) (口語)

#### ②橋本進吉氏「助詞・助動詞の研究」八一頁

現代の標準語では、「の」は格助詞としては体言につ

ぎき、「が」は格助詞として用言又はこれと同資格のものにつゞいて、之に対する主語を示す。但、用言が連体形をなして、それ自ら体言に準ずべきものとなり、又は、体言につゞく場合には、「の」が主語をあらはす為用ゐられる事がある。

#### ③佐久間鼎氏「現代日本語法の研究」二六九頁

主語を表すのに、普通には、「が」が用いられますが、「の」も用いられることがあります。「の」は、その述語が連体形に終わる節の主語に付けるのが普通だといわれます。

### 「主格・対象(語)格説」

①国立国語研究所「現代語の助詞・助動詞——用法と実例——」一六七頁

述語が連体形で、連体節(「の」のくする「活用語連体形」+体言)の形)の主語・対象語を示す。

②松村明氏編「日本文法大辞典」(「の」の項、阪田雪子氏担当)

連体修飾の連文節の中で、主格・対象格を表す。

## 3 松下氏の連体格説について

松下大三郎氏(「標準日本口語法」二五九頁)は、以上の考え方と全く異なる説明をしている。

月・出る頃

雨・降る日

の「——」は動詞であつて、ある事柄を叙述してゐる。さうして、上の「・・」は、その事柄の主体を表してゐる。事柄の主体を表すのであるから、之を主語に換へて、「月が」「雨が」：：のごとく言つても意義は通ずる。しかし、「——」は主語と違ふ。やはり連体語である。主体を主体として表すのではなく、主体を以て事柄の所属を表すのである。だから、「が」を用ゐずに、「の」を用ゐる。「月が出る」は、「月が出る」ではなく、月といふものに就いての其れの「出る」を表すのである。故に主格と言はずに、主体を表す連体格といひ、その用法を連体格の主体的用法といふ。

しかし、私は、やはり松下氏の主張は成り立たないと考える。以下、そう考える根拠を簡条書きの形で列挙しておこう。

①「雨の降る日」の「の」が連体格だとすると、「雨の」はすぐ下の述語「降る」を飛ばして、名詞「日」を修飾することになる。「雨の日」と続くわけで、この例の場合は何の不都合もないが、そうは考えられない例もたくさんある。

母の作ってくれたお菓子 ↓ 母のお菓子

色の黒い牡丹 ↓ 色の牡丹

頭の痛いとき ↓ 頭の時

戦争のない世界 ↓ 戦争の世界

風の静かな夜 ↓ 風の夜

②松下氏は、「の」は連体格を表すから「が」を用いずに「の」を用いるというが、先にも挙げたように、「の」と「が」が自由に置き換えられる例は少なくない。③「の」には古代から主格や対象(語)格を表す用法があつたのだから、現代語にもあつておかしくない。「が」は現代語では普通主格と対象(語)格を表すが、「我が国」「君が代」のような、古代からの連体修飾の用法も残っている。

④方言には、「の」が主格や対象(語)格を表す例が少なくない(先掲、橋本氏、佐久間氏の著書にも指摘がある)。

これらによつて、私は、松下氏の考え方は成り立たず、やはり一般に説かれているように、連体修飾句の中の「の」と「が」は、主格と対象(語)格を表す、と考えるべきだと思ふ。

## 二 「の」と「が」の使い分け

### 1 田中章夫氏の方法

連体修飾句中の「の」と「が」の使い分けについては、田中章夫氏の「『天気がいい時』と『天気のいい時』」(講座現代語・巻六、三五二頁)という論文が示唆に富む。そこで、以下は田中氏の論述に沿つて検討を進める

ことにする。

田中氏は、「天気(ノ・ガ) いい時」という例を使って、これを「天気にあたる部分(主格)」と「いいにあたる部分(述格)」と「時にあたる部分(被連体格)」の部分に分け、それぞれについて、どんな場合に「の」と「が」の使い分けが生じるかを検討している。

その結果、「が」は使えるが「の」は使えない、というパターンが多さが、第一に目に付く。そこで、このパターンについて、田中氏の指摘を私なりに整理することから始めよう。

A 「天気」にあたる部分(主格・対象(語)格)

①程度・数量などを表す、副詞的な性格を持つ体言の

場合

連日、が三〇度をこえる猛暑

最高、が夕ウー一八〇〇円に達する暴騰

大部分、がくさっているリンゴ箱

②副助詞などが付いて、①と同意の体言になった場合

先生まで、が参加なさる必要

バスをおりてから、が三〇分かかる村

一〇人ばかり、が集まる会

③形容動詞語幹のような、情態性の意味を表す体言の

場合

水の不便、が解消しない土地

仕事、熱心、がわざわざわいした彼の不幸

昔のきれいさが、が失われてしまった溪谷

④不定詞や指示語である場合

どこ、が、故障している車

いつ、だ、つ、た、が、わからない契約

そこ、が、明らかになる解答

⑤形式名詞である場合

こと、が、表だってしまう前

最後の、が、見えなくなった時

早く行った方、が、いい場合

B 「いい」にあたる部分(述格)

①「名詞十である」の形の場合

主人、が、弁護士である家

縦横、が、九〇センチと一四センチである、長方形

人口、が、五〇〇万、だ、つ、た、東京

②受身・使役などを含む、複雑な表現になっている場合

先生の人格、が、印象づけられる、話しぶり

父、が、捺印させられた、書類

夫、が、到着した、で、ある、う、時刻

③補語や連用修飾語などを伴っている場合

子供達、が、勢いよく、かけ登った、石段

成績、が、かえって、落ちる、塾

道、が、県庁に、ぶつかる、手前

④接続や中止法の表現を含む場合

天氣がよくて、暖かい日曜日  
子どもがふり返りながら、遠ざかって行く姿

警官が飛び込み、泳ぎつき、助けあげる間

### C 「時」にあたる部分（被修飾格）

①副詞句を構成する体言である場合

電気が消えた途端、

日本経済が成長した結果、

市長が代わったため、

②形式名詞的なものである場合

生活がずさんなのは、

母が注意したせい

二人が生活できるくらいは、

## 2 「が」から「の」への置き換え

田中氏は、これらの条件を整理して、次のように纏めている。

I Aの「天氣」にあたる部分（主格・対象（語）格）

と、Cの「時」にあたる部分（被修飾格）に位置する

名詞が、名詞らしい名詞であること。

II Bの「いい」にあたる部分（述格）の構造が比較的

単純で、短いこと。および「である形」でないこと。

このうち、IIは、田中氏の説明でおおよそ理解できる。前節にも触れたように、「の」の主たる機能は連体修飾

であるが、そのことがIIの条件下では「の」をいかにくして考えると考えられるからである。

まず、Bの②と④のような、述語の構造が複雑な場合、その主格や対象（語）格は、その表示を本務とする「が」で表すことができるし、それで自然である。しかし、「の」は本務が連体修飾であるから、連体修飾句の中でも「比較的単純で、短い」述語の主格や対象（語）格を表すのがせいぜいで、複雑な構造を持つ述語の主格などは表しえない、と考えられるのである。

Bの①のように、述語が「名詞十である」の構造を持つ場合は、さらに明らかである。「の」は連体修飾を本務とするから、この種の例の「が」を「の」に変えると、

主人の 弁護士

人口の 五〇〇万

のような連体修飾関係が形作られてしまう。少なくともその可能性が非常に高くなって、「主人（ガ）弁護士である」「人口（ガ）五〇〇万人だった」という主格関係とは受け取りにくくなるから、「の」が使いにくいのである。

しかしながら、一方のIについては、かなりの問題点があると思われる。田中氏は、「天氣」にあたる部分（A）と「時」にあたる部分（C）に「名詞らしい名詞」が用いられないと、「の」は使いにくいと言うのだが、「名詞らしい名詞」というのは抽象的すぎる。それは、

田中氏が挙げた合計七つの条件を見ても、やはり不明確である。「名詞らしい名詞」はどう定義されるのか、どうしてそれが「が」から「の」への置き換えを左右するのか、判然としないのである。

この点、もう一步踏み込んで細かく検討する必要があると思うが、残念ながら今の私には成案らしきものは全くない。ただ、ここでは、Aの①②の条件では「が」を省略できる、という事実には注意してよいと思われる。

Aの①②の例では、

①連日 三〇度をこえる猛暑

最高 ダウ一八〇〇円に達する暴騰

②先生まで 参加なさる必要

バスをおりてから 三〇分かかる村

のように「が」を省けるのに対して、その他の条件の例では省けないのである。

これらには、もう一つ目立つ特徴がある。他の条件の例では、田中氏の指摘した通り極めて不自然ではあるけれども、「が」から「の」への置き換えも全く不可能ということではない。

A③水の不便の解消しない土地

④どこかの故障している車

⑤ことの表だってしまう前

B①電気の消えた途端、

②生活のすきんだのは、

その点から言えば、これらの条件は、「の」の使用を全く拒否する条件ではなく、使用を不自然にする条件なのである。それに対して、Aの①②の条件の場合は、

①連日の三〇度をこえる猛暑

最高のダウ一八〇〇円に達する暴騰

②先生までの参加なさる必要

バスをおりてからの三〇分かかる村

のような例は、ほとんど考えられない(①の最初の例も、「連日」の下に読点を打つか、「三〇度をこえる連日の猛暑」とするかしないと、変である)。つまり、Aの①②の条件は、他の条件と違って、「の」の使用を拒否する条件だとも考えられるのである。

「が」を省略できるかどうか、このことにどう関係するのか、なお不明のままである。しかし、何らかの関係があるとすれば、「が」の省略の可否を考えることは、連体修飾句中での「の」の使用の可否を検討する糸口になりうるのではないだろうか。

3 「の」から「が」への置き換え

それとは逆に、連体修飾句の中で「の」が用いられている場合は、大半が「が」に置き換えられる。しかし、ここでもやはり、「が」に変えにくい場合がないわけではない。田中氏は、「慣用的な言い方」にこの種のものがあるとして、次のような例を挙げている。

大勢のおもむくところ

ドスのきいた声

気のない返事

確かにその通りで、これらの表現は慣用句とも呼べるもので、そのために「の」を「が」に変えられないと思われる。だが、もう一種、「の」は使えるが「が」は使えない条件があるように思われる。それは、近くに主格や対象（語）格を表す「が」がある場合である。

罪のないことがはつきりした。

顔色の悪いのが気になって、

下痢しやすい夏と、

抵抗力の弱い離乳期が重なるのだから、

口のきき方の静かなのが特徴である。

これは、言うまでもなく、「が」が重なるのを避けるための処置で、したがって「の」にした方がより自然だと言うに留まる。しかし、それでも、「が」が使いにくいことは確かだと言つてよいのではないだろうか。

#### 4 「の」と「が」の違い

以上に検討してきたことから見ると、連体修飾句の中で主格や対象（語）格を表す「の」と「が」には、次のような違いがあることが分かる。

- ①「が」は、「慣用的な言い方」や「が」の重なりを避ける場合を除いて、一般に用いられる。

このことは、主格や対象（語）格の表示を本務とする「が」が、連体修飾句の中でもその機能を果していることを意味する。慣用や「が」の重なり回避は、「が」の機能に起因するものではなく、その点で例外と見なしてよいからである。

事実、田中氏も指摘している通り、「慣用的な言い方」には、「が」しか使えないものもある。

気が気でない様子

足が出た金額

- ②「の」は、その使用にいくつかの制約があり、自由には使えない。

これは、すでに指摘した通り、「の」の本来の機能が連体修飾にあるからで、その点で「の」は、連体修飾句の中でも主格や対象（語）格を表す機能を真に獲得したとは言いがたい。主格や対象（語）格を表すのは、連体修飾句の中でも、やはり「が」なのであって、「の」はその一部を共有しているにすぎないのである。

さて、それは、

雨が降る日 —— 雨の降る日

英語ができる人 —— 英語のできる人

天気がいい時 —— 天気の良い時

のような、「が」も「の」も使えるような場合、両者には何の違いもないのだろうか。そして、違いがあるとすれば、それはどんな違いなのだろうか。

ここで確認しておかなければならないのは、右に挙げた①と②の違いである。①と②から見る限り、連体修飾句中の「が」と「の」は、明らかに異なっている。同じ機能を果しているとは、決して思えないのである。

そして、両者によつて表現される意味も、確かに、微妙に違つていよう感じられる。「雨が降る日」の方は「雨が降る」という主格関係の結び付きがはっきり感じられるし、「雨の降る日」ではそれがあまり感じられないのである。そうして、後者にはむしろ、「雨の日」という連体修飾関係の結び付きさえ感じられる。

従来の研究者たちが言葉を揃えて、両者は全く同じ表現ではないと言ひ、佐久間鼎氏が「雨の降る日」には何がしかの含蓄があり、「雨が降る日」にはそれが無いと指摘したのも（前掲、「現代日本語法の研究」二七〇頁）、この辺りの事情を言つてゐるものと思われる。

ただし、両者の意味的な違いは、それで十分に明らかになつたわけではない。右に挙げた違いも、あえて言うまでもなく、両者から何がなしに感じられる一種のニュアンスの差にすぎないのである。そうである限り、それは、「の」と「が」の相違を明らかにする根拠とはなりがたいであらう。

そうしたニュアンスの差がどこから生じるのか、それは「の」と「が」のどんな違いに由来するのか、—— こうしたことが厳しく問い直されなければならないのだ

が、まだはつきりしたことは何も分かつていないのである。

ただ、手掛かりが全くないわけではない。田中氏の調査で指摘されたいくつかの条件を、「の」「が」の機能という観点から捉え直すことが、その一つである。中でも、先に指摘した、「の」と「が」の置き換えの可能性の強さには、注目してよいのではないだろうか。

先には部分的な指摘に留まつたが、田中氏が「の」と「が」の置き換えについて指摘された条件は、すべて、置き換えを強く拒むものと、必ずしもそうではないものとに二分されるように思われる。とすれば、まずは前者と後者の相違を明らかにすることが問題となるだろうし、それらが「の」と「が」の機能にどう関係するかも問われることになるはずである。

連体修飾句中の「の」と「が」の使い分けは、こうしたことを子細に分析することから得られるように思われる。しかし、今回は、そこまで至る余裕がなかった。今後の課題として、引き続き考えたいと思う次第である。

（平成四年度修了生、中国在住）